Cutting-Edge［カティング・エッジ］

ジェンダー問題解決のカギを提示する最前線書誌情報誌

2014.6 第51号
ムーブ発

ジェンダー・エッセイ

男女雇用機会均等法の改正指針、7月1日施行

――同性間の言動もセクハラに――

水谷（みずたに） 英夫（ひでお） 弁護士

アメリカのアリゾナ州フェニックスにあるレストランチェーン大手「チーズケーキ・ファクトリー」が、店舗内で男性従業員間のいわゆるセクハラを店長らが黙認したとして、米雇用機会均等委員会（EEOC）からアリゾナ州の連邦地裁に提訴された。同社は当初、事実を否定していたが、最終的に被害者の男性3人に合計34万ドル（当時のレートで約3,400万円）を支払うことで和解が成立したのは、2009年11月のことである。

事件の内容は、男性従業員3人が、先輩の調理スタッフら5～10人の男性従業員から、数ヶ月間、部屋の角に追い詰められて脚を持ち上げられ、ズボンを脱がされて腰を押し付けられる等のハラスメントを20数回にわたって受け、被害を店長ら監督者に訴えたが、何らの措置も講じられず、これらの従業員はうつ状態となって退職を余儀なくされたことから、EEOCが被害者3名の従業員にかわって提起したものであった。アメリカでは近年同性間のセクハラが急増しており、EEOCが提起したセクハラ訴訟のうち、男性が被害者となっているものは、1992年～2012年の20年間で8%から18%に倍増し、その多くが男性従業員同士のいわゆる「同性間セクハラ」といわれるものである。

我が国でも職場におけるセクハラが後を絶たず、これまではセクハラの多くは（特に男性から女性への）異性間の問題と考えられてきたが、最近では、このように同性間でのセクハラが増加する中で認識が改められつつある。厚生労働省は昨年12月に、同性間の言動でも職場のセクハラに該当することを盛り込んだ「男女雇用機会均等法の改正指針」を公布し、今年7月1日に施行されることになっている。例えば男性上司が男性部下に対して、「男のくせに!」と叱責したり「最近、奥さんと夜の生活どう」などと聞いたり、女性同士が女性部下をしつこく食事に誘ったりする行為や、いわゆる同性愛（ゲイ、レズ）に基づく性関係の強要なども、このようなものに該当するのである。

ところで近年問題とされるものは、このような性的指向などに基づくもののみならず、パワハラやいじめの手段としての悪質な性的ハラスメントが同性間で行われていることが明らかになってきており、上述したアメリカの事例も、職場におけるパワハラやいじめの一環としてのものと捉えられている。このような傾向は、特に四六時中寝食を共にして勤務する警察や軍隊などの、いわゆる「制服職種」で多発している。

我が国の近年における同性間セクハラの例として、2011年5月、東日本大震災による福島第一原子力発電所の周辺警備のため、福島県に派遣されていた兵庫県警の男性巡査ら4名が、宿泊先のホテルの自室で、後輩の男性巡査を手錠で拘束したうえ、全裸にして撮影していた事実が発覚したケース（2011年8月23日付『読売新聞』）や、2008年7月、陸上自衛隊勝田駐屯地（茨城県ひたちなか市）の施設教導隊の新入隊員6名が、福島県内での演習終了後、全裸で演習場正面入口に集合して、先輩や教官の拠収車輌を見送るという「儀式」をしていたことが発覚したりしている（2008年12月30日付『しんぶん赤旗』）。

同種の行為は、小中学校のいじめでも頻発している。例えば、2012年10月、彦根市の中学校で、3年生の男子生徒が同級生の男子生徒2人から、昼休み時間に暴行されたあげく、全裸にされ、写真をアプリで流され、加害者生徒が逮捕されるという事件が発覚している（2012年10月4日付『中日新聞』）。このように「同性間セクハラ」は、パワハラやいじめの一環として、職場の部下や同僚を侮辱する手段として用いられていることにも、我々は注視する必要があると思われる。

マンガコーナー

テーマ 「リケジョ（理系女子）」 押山（おしやま） 美知子（みちこ）（専修大学文学部助教）

■『イーフィの植物図鑑』

ある大学の理工学部で文学の講義をしている。やはりと言うべきか、女子学生の数は、男子学生に比べてかなり少ない。彼女たちを称して「リケジョ」と言うのだろうが、その呼び方が臭わせる特異性は私自身は別段感じず、専攻分野が理系というだけで女性がことさら取り沙汰されるのは、未だに科学＝〈男性領域〉というイメージが、世間一般にまん延しているためだろうか。

少女マンガのリケジョ・キャラクターは、その特異性が強調される傾向があるものの、年代によって受ける印象は大分異なる。志賀公江『ルルが風にのって』（1972年）のルルは、幼少期から英才教育を受けた天才科学者でありながら、その優れた能力が自身の幸福に結びつかず、自分が発明した実験装置と共に自らの頭脳を葬り去る。他方、佐々木倫子『動物のお医者さん』（1988-1993年）の菱沼聖子は、ルルと比べると相当に肩の力が抜けたリケジョだ。獣医学部の院生である聖子の、超が付くほどのマイペースぶりや「血液検査のあとの器具の掃除が大好き」等の特異性は、彼女の魅力的な個性として描き出される。

特異性が強調されがちなリケジョを、個性的な魅力のある存在として描く今注目の作品が、奈々巻かなこ『イーフィの植物図鑑』（2012年より連載中）である。「17世紀西ヨーロッパのデュボス大公領」という架空の世界を中心的舞台とする本作の主人公・イーフィは、世界中を旅して薬になる植物を探して集める「植物採集者（ブランツ・ハンター）」だ。人間のために植物を狩る身でありながら、狩られた植物の命のために涙を流すイーフィの姿は、「命を奪い／奪われる」人間と植物の一方的かつ固定的な関係性に新たな視点を投げかける。植物の多種多様な命のあり方を示し、同じ生物である人間と植物の近しさを感じさせるイーフィの眼差しは、自然と人間の媒介者としてのリケジョに潜む豊かな可能性を垣間見せてくれるのである。

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939　ホームページ: http://www.kitakyu-move.jp
Fax: 093-583-5107　E-Mail: move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第51号
発行 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
発行日 2014年6月10日
指定管理者（公財）アジア女性交流・研究フォーラム

MOVE この人にきく

続け、未来の理系女子

小澤（おざわ） 未央（みお）
九州大学大学院環境医学分野久山町研究室学術研究員／ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン研究員

「あなたの知っている女性科学者は誰ですか?」と聞かれたら、キュリー夫人以外は名前をあげるのも難しいのではないでしょうか。総務省の調べ（平成25年）によると、女性科学者の割合はロシア41.2%、イギリス37.7%、アメリカ33.6%、フランス25.6%、韓国17.3%、日本14.4%で、女性科学者の割合は世界的に低く、特に日本は低い現状にあります。

それはなぜでしょうか?その要因のひとつは教育環境にあると思います。私自身は幼少期より科学者である父の影響もあり、科学に囲まれた環境で育ちました。「どうして人間の手は5本指なのか?それを考えると面白くないか?」というのが父の口癖でした。家に帰ると科学関連のテレビ番組が流れていました。人体の不思議、動物の生態の不思議、人間の感情・記憶の不思議など、日常にある様々な不思議に自然と目を向けるようになっていました。宇宙や人間の心理にも関心がありましたが、大学では栄養学を学ぶことに決めました。食は人間の基本行動であり、これを勉強することは将来自分や家族にとても役に立つ分野だと考えたからです。積極的に女性の科学の目を育てる環境があれば、理系に進む女子高校生も増えるでしょう。

では、科学を研究するということになると女性には向かないのでしょうか? 私の場合、大学で栄養学を学んでいく過程で人の健康、病気を予防する手段としての食に興味を持つようになり、大学院に進学後、現在の研究テーマである食事で認知症を予防するという目標にたどり着きました。科学研究の醍醐味は疑問に思ったことをとことん追求していくことにあります。概して、女性は勤勉で不屈です。長期的なスパンで探究をしていくことに適していると思います。また、多様性を持つ自然を対象とする科学研究に、女性ならではの視点を加えることができます。女性研究者が増えることは科学研究を多様なものにするという意味で、とても望ましいことなのです。

また、女性研究者が少ない要因として正規のポジションに男性を優先して就けるという慣行が残っています。実際、学術研究員（ポスドク）の女性の平均年齢は上昇しています。この背景には科学の研究は女性には向かないという偏見と性別役割分担意識があります。女性科学者が結婚し、子どもを持つ場合、家庭も研究もと二重の負担がかかります。また、夫婦で研究者の場合には別居を余儀なくされることもあります。

しかし、研究と家庭を両立させながら研究成果を上げてきた女性研究者がいるのも事実です。世界最大のフランスの化粧品会社ロレアルグループはユネスコとともに女性科学者の地位向上と科学の発展への功績を称え、世界規模で「ロレアル－ユネスコ女性科学賞」を推進しています。今年も5人の女性研究者に贈られましたが、そのほとんどが妻であり母親です。本人の努力はいうまでもないことですが、おそらく女性研究者が研究生活と家庭生活を両立させることへの理解としくみが整っているのではないかと思われます。九州大学でも女性研究者キャリア開発センターが設置され、女性教員増加策や女性の能力開発・発揮に対する支援の充実策と同時に、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた事業が進められています。

科学の分野に女性研究者が増えていくためには、働き方を含めロールモデルを示すことが重要です。私は九州大学大学院環境医学分野久山町研究室で、日本人の地域一般住民を対象として食事と認知症との関連を検討してきました。その研究成果が評価され、将来有望な若手女性研究者を支援し、自国以外で研究を奨励する2014年「ロレアル－ユネスコ女性科学賞 国際奨学金」を日本人として初めて受賞しました。この国際奨学金により、英国のユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで研究する機会を得、国際的な環境で西洋人を対象とした認知症の研究をスタートさせています。未来の「理系女子」がより多く後に続くよう、家庭生活と両立させながら研究成果を世界に発信していくことは、先を歩んでいるものの責任でもあるだろうと思います。